壊され，裸地が拡大していっていることを示す。事実，バオバブをはじめ，木本類も急速に破壊されつつあるのである。熱帯半乾燥地域における人為の影響による自然生態系の破壊としてとらえなければならない現象である。

コカコーラは，世界を制覇したといわれている。東アフリカにおいても，このことはあたっている。この地域で安心して飲める水は，ビン詰めの清涼飲料水である。まして，乾燥した地域では，唯一の飲める水である。人口のまばらな遊放民の生活する辺境であっても，車の通れる道路さえあれば，部落の店でナイロビから運んだ「文明の水」を売っている。この水には，ずい分お世話になった。しかし，これは高い水であり，現金収入のほとんどない遊放民には無縁の水に近い。また，かれらにとっては，車の通る道もそれほどありがたいものではない。モウモウと砂ボコリをあげて車が走ってくると，かれらはあわてて逃げる。家畜を追う場合には，道路をさけ，草原やブッシュの中を道路と平行に移動している。道端のアカシアの木かげで休んでいたラクダを追うボラン族の老人が，われわれの車を止め，"Notaka mazi Kidogo."（水を少し分けてくれ）といったことばは，ナイロビ――アディス・アベバ道路建設のキャンプのために掘削された深井戸に，もらい水のため集まる人々の姿とともに，たいへん印象的であった。

# 韓　国　雑　感

鈴　木　秀　夫

いろいろ多くの国を見たが，今度の韓国旅行は，もっとも魅力のあるものだった。語りたいことはたくさんあるが，はじめて女子大学で講義をすることになった今，日頃感じていることを含めて小文を書いてみたい。

あらゆる学問は観察にはじまる。ところが，こともあろうに地理学では観察にもとづいていないことが多い。地球表面が研究対象であるのだから，その全体を観察するということは，一人の人間として事実上不可能ではあるが，旅行の機会を少しでも多くとらえることは大切なことである。

ところで旅行をすると，我々の感覚をとらえる事柄は実に多様だ。入国手続きをする時の表現しきれない異国感，言葉の違い，タクシーをつかまえる時，ホテル，食事。これらは，何の専門家であろうと，もっとも強く感覚をとらえられるものであるに違いない。ところが多くの専門家は，早く自分の専門へ関心を限定することを始める。地形学者は地形の違いに目をこらすようになる。国

の違いということが与えるより大きな地理的な差にはむしろ馴化を心がしいる。これは大変にもったいないことだ。しかし専門化は，やむを得ない習性だろう。

この小文で云いたいことは，その多様のなかに専門を持つその持ち方である。どうして，地理学者といえば，だれもかも地形であり，気候であり，都市であり，経済であり，その他若干なのであろうか。雰囲気の違い，ホテルの違い，食事の違いをどうして扱おうとしないのか。それは伝統というものであろう。そして ―― これが一番云いたいことなのだが ―― その伝統とは，男性が，男性たる制約の上に作りあげた伝統なのだ。地理学を学ぶ女性が，どうして男性の伝統を受け継ぐことに努力しなければならないのだろう。キムチの作り方などは，男性には深入りすることのできない領分なのだ。しかし，そこには，その民族の生存を支配する食物の知慧がこめられているのだ。北に行くほど，どうして料理が一層からくなるのだろうか。単なる偶然的，あるいは歴史的習慣であるとは思えない。寒さによるカロリーの消耗を穀類の大量摂取でおぎなう知慧だというようなことはないのだろうか。

食物一つとっても無限に深く，広く問題はひろがる。今，学問を学ぶ女性の多くは，好むと好まざるとにかかわらず，家庭で大根を刻まざるを得なくなるだろ。その時，その刻み方にも秘められた歴史と風土の背景に想いをいたして研究を続けることはできないものだろうか。地理学評論に，そういう女性の大論文を見ることができたら，何と楽しいことだろうと想像する。

１９７２．１０．１３　韓国からの帰途，山陰線の車中にて。

# 松井先生より学んだこと

原　　高　則

このような題でものを書くことは大げさなことを好まれない先生には御迷惑かとも思いましたが松井先生退官記念号ということで近況報告をかねて想い出をつづります。

研究室から越谷市の中学校へ転出して９年目になりました。どうやら妻を迎えることができ４７年４月より越谷市蒲生へささやかな新居を構えました。勤務先も相手が同僚だった関係で私の方が越谷市立富士中学校へ変りました。校名こそ日本一を目指す富士中ですが毎年１万人の人口増がある越谷市では教育行政がこれに追いつかずプレハブ校舎から出発した新設校です。トリプル・プレイならぬ結婚・転勤・新居建設が重なっただけにこの３月から４月にかけては大変にいそがしい思